

Title	華族家の教育史：ある大名華族家4代の聞き取り調査から
Sub Title	Note of private-history about the peerage focused on education and social change
Author	小山, 彰子(Oura Koyama, Akiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.120 (2008. 3) ,p.171- 195
JaLC DOI	
Abstract	This is a brief note about the private-history of the peerage focusing on education and social change. The note is based on both historical materials and interviews from 4 generation of ex-peers. As Japanese history tells us, the peerage of Japan was established in Modern Meiji (1869), and was abrogated after WW II (1947). The role of the peer is difficult to define in short though at least it would not wrong to say that they were "the guard of the Imperial". "Narrative" of older generations often referred to His and Her Majesty. In contrast , younger generations seldom referred to the nobles. On the other hand, in their private life, "education" became much important than ever. For example, Home education to School education, noble Gakushuin to other meritocratic options. Some of the peers, despite their lineage, changed their minds on not relying on descent but on surviving by their own abilities based on education through the rapid change of their surroundings. This note shows how each generation of one noble family have recognized and accepted their lives by interviewing and utilizing complementary materials which were offered by the interviewees.
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000120-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

華族家の教育史

—ある大名華族家 4 代の聞き取り調査から—

— 小 山 彰 子* —

**Note of private-history about the peerage focused
on education and social change***Akiko Oura Koyama*

This is a brief note about the private-history of the peerage focusing on education and social change. The note is based on both historical materials and interviews from 4 generation of ex-peers. As Japanese history tells us, the peerage of Japan was established in Modern Meiji (1869), and was abrogated after WW II (1947). The role of the peer is difficult to define in short though at least it would not wrong to say that they were “the guard of the Imperial”. “Narrative” of older generations often referred to His and Her Majesty. In contrast, younger generations seldom referred to the nobles. On the other hand, in their private life, “education” became much important than ever. For example, Home education to School education, noble Gakushuin to other meritocratic options. Some of the peers, despite their lineage, changed their minds on not relying on descent but on surviving by their own abilities based on education through the rapid change of their surroundings. This note shows how each generation of one noble family have recognized and accepted their lives by interviewing and utilizing complementary materials which were offered by the interviewees.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学)

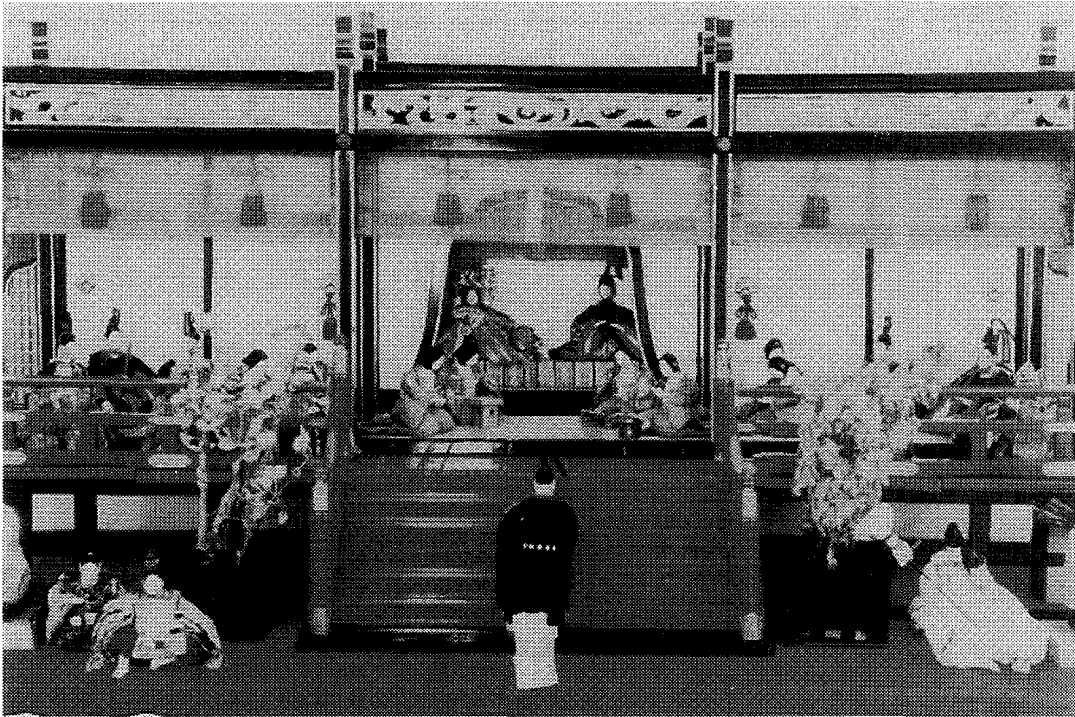


図1. W家の雛道具・現在は文化学園服飾博物館蔵（写真・B提供）

はじめに

階層研究，とりわけ教育を媒介とした階層移動研究が教育社会学の重要な研究課題となっておよそ半世紀が経過した．その中心を担ってきたのが，SSM 調査データを用いた時系列的，計量社会的分析であった．これらの調査研究・分析は，近代化の過程において生じた社会変動と人間の姿を多角的に描き出し，これまで多くの日本人が持っていた「学歴を獲得すれば豊かな所得を得ることができ，幸福な生活（曖昧な表現ではあるが）を達成できる」という漠然とした共通神話が幻想であったことを統計を用いて明らかにした．共通神話とはすなわち，我が国の教育が，近代的教育制度の整備に政府が着手した明治初期以降，学歴取得による社会的達成の道具であった，という見方である．教育は，男性にとって，立身出世を約束する確かな手段であった．一方，女性にとってのそれは，男性に比

して直線的な図式で語りうるには、紆余曲折の道のりがあるが、戦後は男女平等の教育機会のもと、女性にも学歴達成はある程度の立身出世の道を開いたことは否めない。このような図式の崩壊に伴い、一般的な学歴達成では、もはや立身出世が困難になったというべきである。最近では、アカデミックな領域にとどまらず、広く一般にも、階層とリンクした教育問題は大きな関心事になった。「格差社会」「二極化」「教育分化」等々が示す言葉は、その一端をよく表している。「学歴を獲得しても、将来が保証されるとは限らない」という一般の危機意識は、より入念な教育戦略を講じる層と、そこから脱落していく層という、二分化された集団を生み出しているかもしれない。それでは、元々階層ピラミッドの上層にいた人々は、教育をどのようにとらえ、どのような戦略を敷いてきたのであろうか。このような疑問のもと、筆者は、近代教育制度誕生の明治期を起点とし、上層の家族を複数世代調査し、世代ごとの生活経験の「語り」を聴取することにより、当事者にとっての教育の位置づけ、社会変動の中、彼らが教育をどのように意味づけ、教育にどのような役割を付加させてきたのかを考察することを試みた。この根底には二つの理由がある。第一は、教育が単一の世代によってのみ完結的に達成されるというより、むしろ、それ以前の世代が生きた社会状況と個別の教育観、教育戦略が後続の世代に大きく影響すると考え、このことを明らかにしたいと考えたからである。SSM調査、その他官庁統計等、いわゆる大規模標本調査は調査研究の歴史が新しいことから、現時点においては、せいぜい2世代の教育の特質を探索するのが限界である。しかしながら、顕在的な教育事象も、実はもっと長い時間的蓄積の支えがあって初めて眼前に現れるのではないかと筆者は考えている。第二には、調査を上層家庭を対象に行っていることと深く関連するが、長い歴史を持つ家庭には、文化的蓄積や維持安定性が保持されている。教育や文化を人々が取捨選択するとき、そこには社会変動を超越した文化的価値をめぐる心性が働くのではないかと考え、そのこと

を探索したいという試みが本研究には含まれている。そのため、層を固定し、ミクロかつ歴史的、個別的な生活史を考察するこの試みは、我が国の教育を改めて考える契機になるのではないかと考えた。

1. 本研究における「上層」という定義

「上層」とは何か、このことを明確に定義することは困難である。「階級」と「階層」の概念の違いから見ると、「階級」の場合、上層に対応する立場は「支配階級」ということになるであろうか。マルクス主義の持つ「階級」の概念が、生産手段の所有・非所有に基づく地位の違い、二者間のより闘争的かつ異質的な関係を問題にしているのに対し、「階層」はこうした生産関係に基づく物質的基盤から切り離され、職業、収入、学歴、財産、といった非限定的な指標を軸に、威信の大小で序列化したものと言える。この序列化の相対的上位層が「上層」ということが可能だろう。また、「上層」に類似した「上流」という表現もある。「上層社会」とはあまり聞かないが、「上流社会」という言葉は広く普及しており、曖昧だがイメージが付きやすい。この言葉も定義が困難だが、ヨーロッパにおける王族、貴族社会の構成員、アメリカのような経済的成功を基盤とした成員により構成された社会がいわゆる「上流社会」と言えるだろう。一方、我が国の皇族を頂点とした象徴資本がとくに優越する集団の中には、現在、経済資本が必ずしも上位に位置しないケースも存在するだろう。しかし、本研究においては「上層」の枠内で考察の対象と考えている。基本的にはSSM分類の社会的威信に加え、家柄、身分といった象徴資本、経済資本もフローのみ着目せずストックを有した集団を想定し、こうした指標の複合的上位層を本研究においては「上層」と位置づけた。

2. 先行研究とその取扱いについて

本稿は、元大名華族4世代に行った聞き取り調査の分析であるので、

ここでは、特に華族に関連する文献についてのみ整理して記した。華族に関する研究は、さまざまな領域においてなされており、研究資料も膨大な量であるが、中心となっているのは歴史の領域である。しかし、ここでは、歴史学領域は割愛し、社会学、文化人類学、その他の最近の文献を挙げたい。

第一に社会学領域においては、森岡清美が華族の「家」制度、婚姻の様態を中心とした分析をまとめた『華族社会の「家」戦略』（森岡，2002）が挙げられる。華族における武家華族と公家華族の特質を鮮明に描き出しているが、分析する時代を明治期に限定しているため、文書および文献資料に限定しての考察にとどまっているが、社会学的に上層、とくに華族に焦点化した研究の嚆矢ではないかと思う。

第二には、それとは対照的に文化人類学領域の、タキエ・スギヤマ・リブラが『近代日本の上流階級』（リブラ，2000）において、世襲エリートである華族を非世襲エリートとの関連で位置づけ、参与観察、面接調査、アンケート調査をもとにリアリティある記述を展開している。リブラは華族という世襲エリートの文化を広範に描き出したエスノグラファーである。

本稿は、調査協力者の「家庭教育と学校教育の経験」を聴取するという基本メッセージを調査協力者に伝えた上でインタビューを実施したが、結果としては、筆者の予想を超える広い文化的経験を聴取できた。このことは、調査協力者にとって、「教育」という言葉が生活そのものに密接に関わり、限定的に理解されるより、むしろ、ライフヒストリー全体を覆うイベントであることを示唆している。差異化された文化資本のどの部分が強く伝播され、再生産されるのか、いったん、隠ぺいされたり否定され、影を潜めた資本が、隔世して肯定的に再表出されたりする。こうした再生産のダイナミズムを筆者が考察していく上で、リブラの記述に大いに助けられた。また、本稿における最年長の調査協力者は現在95歳の大正生まれの女性であるが、調査協力者の語る明治期の親世代の暮らし、調査協力者

自身にとって、すでに「歴史」になっているであろう幕末の因縁が、あたかも、つい先頃起こった出来事のように生き生きと語られる様子等を理解するためには、森岡の分析は不可欠な資料であった。

第三に学術研究書ではないが、華族研究を行う上で、貴重となる資料がある。華族自身の著作や、侍従、ジャーナリストによる資料である。佐藤朝泰は「閨閥」「豪閥」「門閥」(佐藤, 1981, 1987, 2001)において、婚姻を基盤とした上層の社会ネットワーク、上層の再生産の様態を系図を例示しながら分析している。これは、「身分」という象徴資本が最大の資産である華族が、経済資本が最大の資産である財閥や、権力構造とどのように結びついているかを示す貴重な資料である。

華族は常に世間の注目を集める「公人」であったが、新聞メディアの発達に伴い、明治末年頃から、華族の動向、とくに私生活の側面が、新聞、とくにその中の「女性欄」に写真入りで頻繁に掲載されるようになった。なかには、スキャンダルとして取り上げられる華族も増え、「雲上人」から、より身近な、批判の対象としても一般人に近づいたといえる。戦後は、華族自身が積極的に著作を記し、華族文化を公開する傾向もあるが、元侍従や皇室ジャーナリストによる、生存する現在の皇族そのものを題材とした著作も増えた。このような著作は、実際に調査する際、事前の、あるいは跡づけの情報として役立つが、あくまで「語られた」内容を筆者が理解するための補助資料の域にとどめ、直接、調査協力者から提供された資料を優先させたことは言うまでもない。

3. 調査の概要とその背景について

筆者が調査協力者と出会い、調査協力者が旧華族出身であったのは全くの偶然であった。筆者は2002年から継続して上層階層の教育に関する調査を行っているが、必ずしも華族を限定的に対象としているわけではない。調査対象者は結果として、セレブリティあるいはその末裔ではある

が、調査対象者への調査依頼は、再生産の視点から、学校を限定して、複数世代同じ学校の出身者という条件下に置いている。つまり、調査協力者には、調査協力者の出自より、特定の学校の出身者であるという条件のほうが重要なものとして理解される。もちろん、学校歴を再生産する家族にとっての「学校」の意味づけ、学校へ付加する価値は、考察の対象であるし、学校歴と再生産は不可分の関係にある。また、調査対象者にはどのような場合でも「紹介者」を通じて面談できるよう配慮した。これはリブラの手法に準じた。その際、筆者は必ず「ご家族の歴史がさかのぼれる方をお願いしたい」と条件を付加し、すでに調査協力者自身が筆者の面接を経験しているので、その経験から次に紹介する調査協力者のイメージは暗黙裡にはほぼ正確に調査協力者に理解され、筆者の希望と隔たりが生じることが回避される。リブラも著作の中で指摘し、訳者である竹内洋も解説で記しているように（リブラ、2000, p. 312-313）、研究者であるという立場のみでは、歴史を持つ出自の人物、とりわけ華族へのアプローチは決して容易ではない。筆者は、これまで本稿における調査協力者以外にも複数の旧華族と面談しているが、その際、誰が筆者の「紹介者」であるのかが大きな鍵であった。旧華族に限定して言及すると、本稿の調査協力者を含め、これまで調査に協力してくださった方々は、アカデミズムに関係の深い立場にあるか、華族の文化的かつ潜在的資産を後世に遺したいという希望を持つグループであるという特殊性は免れない。したがって、筆者の事例を華族の教育戦略として一般化することはできない。しかしながら、本事例のように、元大名華族という特別な身分に生まれ、幕藩体制の崩壊という調査協力者自身には全く経験のない先祖の歴史を取り込んで、現代を生きる世代（調査協力者 A）、特権的華族世界を経験しながら、戦後、華族制度の廃止を身をもって体験した世代（調査協力者 B）、華族社会とは全く無縁に生きる世代（調査協力者 C）、先祖の歴史を自身の日常に取り込み再構成して生きる世代（調査協力者 D）、を連続して描き、実体とし

ては世襲エリートから非世襲エリートへという歴史的社会的変動の影響下にあり、そのような社会的変化にさらされた当事者にとって重要と認識された「教育」を再検討することは十分に意義あることと考えている。

それでは、具体的に本稿における調査協力者の背景と調査の手順を示しておく。調査協力者は、プライバシーの保護の観点から、匿名を守り、便宜的に、世代順に、A, B, C, Dとした。調査は、まず、昭和戦前期生まれのBから始まった。前述のとおり、Bは筆者が集中的に調査を進めていた特定の教育機関の出身者、すなわち、明治期に創設されたフランス系カトリック学校Jの出身者であり、Bの長女Cが同じ学校の卒業生であった。調査はB→A→C→Dの順に実施した。調査の過程で、Bが旧華族出身であること、戦前すなわちBの初等教育期、BがAと同じ旧華族を対象とした私立学校の出身者であることが判明し、学校歴の再生産は、AとBにおいてもなされていたこと、Aは90歳を超えていたが、調査研究への協力を快く引き受け、また、面談に耐えうる健康状態を保持していたことから、実現に至った。A, Bは歴史の蓄積が多いことから、期間を開けながら複数回の面談を実施し、それは現在も継続されている。調査はそれぞれの住居で個別に実施した。C, DはBと近居であり、個別にCの自宅でC, Dの順に面談を実施した。1回の面談はおよそ2時間から3時間の間で行った。

4-1. Aの生活史の「語り」から

Aは大正3年(1914)V家の第3子として東京の湯島で生まれた。両親は同族の大名V家の出身で従兄妹どうしの結婚であった。Aは出生時、仮死状態だったこともあり、いつまで生きられるかわからないという両親の憐憫の情から、ことのほか、可愛がられて育ったという。Aは大正9年女子学習院幼稚園に入園ののち、昭和6年秋に女子学習院正課を修了、その後、選択制の補修科を卒業している。女子学習院50年史によれば、

幼稚園は四谷仮園舎時代、幼児の数が増加したため、明治45年の改編により、華族の子女のみを収容することになったが（女子学習院50年史、p. 369-370）、Aが入園する3年前の大正6年には園児総数が125名と定められている。A自身もそのことに言及し、「幼稚園は爵位を持たない家の人はいなかった」と語っている。父親は、女子学習院の教師がたとえば家臣の身分であっても「先生は先生」という立場をきちんと守るようにと厳しかった。Aにとって「学校とは遊びに行くところだと思っていた」と語ったが、常盤会館で食べたアイスクリームの味や級友と漕いだブランコの記憶以上に、貞明(大正)皇后の行啓の様子や、強く影響を受けた教師や教科の思い出も語られた。Aにとって女子学習院の卒業生であることは生涯を通じての誇りである。Aはその後、長くアメリカで暮らすことになるが、移動には一連の思い出の品と一緒に、常に、女子学習院の修了書と女子学習院50年史が携えられていた。Aは面談の中で、繰り返し、家庭教育の中でも特権階級であることを表に出さない教育を受けられた、戦後はいかに華族であったことを忘れて生きるかが生き残りの鍵であった、とさまざまな周囲の事例を挙げながら語ったが、内面には、強く華族、とりわけ大名華族の出自を意識して生きる姿が伺えた。Aの「語り」口は、尊敬語、謙譲語、丁寧語を中心に構成されており、さながら古典の教科書が映像として映し出されるような美しさがあったが、A自身は、筆者にわかりやすい言語に翻訳して語っているという、学習院言葉で語ったら筆者には到底理解できないであろうと笑った。そして、そのような言葉は、もう語るべきではないし、いつまでもこだわっている、現代では生きていけないとも語った。Aは学校教育以上に家庭教育を重視していた。家庭教育の主たる担い手は父親であった。貞明皇后と同年生まれ（明治17年）であった父親が、家庭采配の中心であったが、常に、幕末維新時に「逆族」であったことが子育てにも強く反映し、皇室には常に「ご遠慮」があったという。爵位授受に関しても、辞退を申し出たが、辞退を申

し出ること自体が、皇室に対する不敬にあたりし子爵を拝受した。政治に忙しい華族と異なり、剛健な体質ではなかった父親の主たる仕事は、公には皇后の御座所に出仕する以外は、領地と東京の3万坪の屋敷の管理、旧藩士の生活を見ていくことだった。父親が家庭管理に熱心だったことは、政治家としての人生を歩まなかったからだとしてAは理解していたが、父親に男性の理想を見出していた。父親は子どもたちの教育にも熱心であったが、精神的には、常に子供たちが特権意識を持たないように、屋敷内の使用人にも勝手に用向きを頼むことは許さなかった。学業面も学科は毎晩父親が監督し、半年から一年先まで家庭学習で進めてあったので、学校で勉強に苦労することはなかった。学科以外の稽古事は当代随一の教師を揃え、ピアノは幸田露伴の妹、幸田延の指導を受け、琴は高橋検校、書道は学習院の小野流を稽古している。また、日曜の早朝には、長刀の名手だった山之内侯爵夫人が出稽古に訪問するので、休日の朝といえども寝坊は許されなかった。父親自身、毎月能の稽古を屋敷内の広間で行うので、執事なども謡などさらっておかねばならず、自身も末席に座らされて退屈な思いもしたという。父親は社会教育にも熱心で、農家の暮らし、畑仕事にも連れて行かれた。博覧会や博物館にもよく出かけたが、その際、父親は必ず「下見検分」をしておき、いきなり畑作業に参加するように見える場合でも、偶然のイベントを装いながら、実は農家と打ち合わせがしてあるのが常だった。地域との関わり合いも熱心で、当時頻繁に起こった火事の場合等は率先して屋根や檜に登り采配を振り、「庶民の殿様」として親しまれていたという。しつけに関しても、割烹（料理）はしなかったが、年末の大掃除のときなど、一家総出で畳返しから障子の張り替えまで何でもやらされた。長兄は畳を外した際、気がつくとな下に敷かれている古新聞を読みふけり父親に叱られていたが、役に立たないながらも、何らかの役割を貰い家族全員で働いたという。また、食事也大抵の華族は父親とは別に食べるのが普通だったが、V家では父親も一緒に食事をした。しつけ

も父親が行った。「リベラルな父親」だったと思うとは言いながら、長幼の序はとくに厳しく、長兄は成長に従って別棟を与えられ、週末のみ家族と過ごすようになった。5人の兄妹は基本的には平等に扱われたが、長兄に対しては別格の扱いであった。東京女子高等師範の付属から跡見塾に学んだ母親に叱られた記憶はない。父親は母親に対して、「子供が中学に入るまではあらゆる社交は断て」と厳命し、母は従っていた。両親は晩年まで仲が良く、それは、両親が同族の従兄妹どうしの結婚をし、家の価値観が一致していたからだと理解していた。晩年、別荘があった神奈川県南部の浜辺を母親の手を引いて歩く父親の姿をしみじみと語った。

Aは19歳で同じ武家大名W家に嫁ぐが、それは「霞会館」の意向であった。華族にとって「霞会館」の意向は絶対であり、それをAは「華族の掟」と表現した。すなわち、縁談には宮内省の認可が必要であり、親族全員の了解も不可欠であった。AもAの両親も、W家との縁談には積極的ではなかったが、先にAの姉がW家の上位にあたる公爵家に嫁いでいた関係で縁談が成立した。父親は当時の日記にAを嫁がせる不安を綴っている。Aの夫W家当主は、子爵の地位にあり、音楽家であると同時にいくつかの企業の役員を務め、富裕な資産を有するいわゆる不労所得者であった。100歳に近い現在でも宮中にて雅楽を古式豊かな装束をもと演奏する機会を持つ。19歳で嫁いだAは20歳で第1子Bを出産している。W家はV家を上回る富裕な子爵家であったが、Aは質素を旨としたV家の教育を子供たちにいかに施すかに腐心したという。子育ての期間中、Aは実家の物質的支援は受けなかった。節句などの道具も一式W家の姑が支度している。Aは子供の教育に関しては、自身の父親が自分にしてくれたことはすべて行ったと自負している。AはBを華族の通例に従って女子学習院の幼稚園、初等科に進学させるが、戦争が激化し、Aと子供たちはW家のクニモトへ疎開をする。しかし、W自身は宮中を離れることはなかった。いかに領主の家族とはいえ、AとBは都会では経

験したことのない辛酸を舐めながら田舎暮らしをし敗戦を迎えた。戦後の華族令の廃止（1946年公布，1947年施行）に伴い，華族たちはそれまでの特権的身分や権利を失ったが，とりわけ資産家であったW家の打撃は著しかった。社会の価値自体も急激に変化した。妻としてのAはいかにして家を維持していくかが急務であり，母親としてのAは新しい日本で，自分の子供たちにどのような教育を授ければ良いのかの判断に迫られたという。疎開先のクニモトから戻っても，Bを学習院には戻さず，自宅から程近いカトリック系女子教育機関J校に編入させた。戦後，学齢期に達した長男も同様に学習院には進学させず，幕末に創設されたL大学付属M小学校に，第3子もBと同じカトリック系女子教育機関J校への進学を選択した。学習院を選択しなかったのは，戦後はAの古き良き女子学習院ではなくなったと感じたことと，疎開先での苦勞，変転する社会において，新たに娘たちの支えとなるものを求めたからだと言った。戦後の社会を逞しく生き抜こうとするAと，すでに過去のものとなった華族社会にとどまろうとするWとの関係は深い溝となり，Bが17歳のとき，AとWは正式に離婚した。まだ30代だったAの将来を懸念したV家の母の勧めに従い，Aは日本文化を深く愛好する富裕なアメリカ人と再婚し渡米した。成人したAの子供たちは折に触れ，アメリカの母親を訪ねた。Aは3年間子供の親権をめぐる裁判で戦ったが，親権は父親が取得した。Aの再婚相手の死去に伴い単身アメリカに暮らすAだったが，Bの熱心な勧めに従って70代で帰国。「私が帰国すれば子供に苦勞をかける」という信念から子供たちの誰とも同居せず，かつてAの両親の別荘があった場所にほど近い高級老人ホームに居住している。そこは旧華族や著名人が数多く居住する贅沢な施設である。再婚に伴ってアメリカ国籍を取得したAは毎年アメリカに税の申告や年金の請求をしなければならないので，株価やドルの変動は毎日テレビや新聞でチェックし呆けてはいられないと笑った。

4-2. Bの生活史の「語り」から

BはAの第1子として昭和9年(1934)に東京で生まれた。弟が昭和15年に生まれるまで一人っ子の「おひいさま」として大切に育てられたという。Bの住まいは現在のM区にあったが、広大な敷地に洋館と祖母の住まいである日本建築の離れがあった。女子学習院幼稚園から初等科4年まで進み、父方の領地に疎開したが、そこでの3年間の生活はBにとって想像を絶する苦難の日々となった。村の子供たちは何かにつけBに嫌がらせを行ったが、じっと我慢して過ごした。母親であるAは、小さな弟妹の世話や、その日の食事の調達や家事に追われていたので、なおさら自分の苦境は言えなかったという。さすがに男の子たちに蛇を首に巻きつけられたときだけは、母親が山越えをして小学校に駆け込み、校長に談判をしたが、校長は当主不在の都会の華族親子には冷たかったという。父親は疎開先は訪れなかったが、ヨーロッパにいる親族が土産として送ってくれた美しい絵葉書セットを使ってBにたびたび手紙を書き送ってくれた。その葉書は今もBは大切に保管している。敗戦を迎え、親子は東京に戻ったが、女子学習院は全焼しており、高田馬場は当時環境がまだ安定していなかったため、住まいから徒歩圏にあったカトリック系女子教育機関J校に編入した。新しく編入した学校では自分が華族出身であることは意識的に伏せて過ごした。この学校生活で、辛かった疎開生活が癒され、Bは母の勧めもあり洗礼を受けた。その後、同じ系列の付属校に進学した。華族令が廃止され、W家の経済は苦境に立ち、母親のAは結婚のとき持参した着物や貴金属、家財も換金せねばならなかった。そのような母親の苦勞を見てBは熱心に学業に取り組んだ。17歳のとき、両親が正式に離婚したが、Bは母の気持ちを理解し、母が婚家を離れた後は、弟妹たちの母親代わりを務めた。間もなく父親は名門公家華族と再婚した。再婚した女性は父親同様、華族文化そのものの人であった。新しい母に内心は猛烈な反発心を抱いていたBだが、そのエネルギーを勉学に向け、学

費も自ら工面してプロテスタント系4年制大学・英文科に進学した。学問はBにとって生きる手段だったという。その言葉どおり、Bは現在に至るまで、公教育、私的 education と変遷はあるものの、「英語」を教え続け収入を得ている。教員資格を取得し大学を卒業したが、一般の有名企業に就職し、その後、私立学校での教鞭も取った。Bの配偶者になったのは、Bの幼なじみZであった。Zはカトリック学校出身で実家は中堅の商家であった。Bの境遇を理解し、同じフランス系カトリック学校出身のZであったが、Zの実家では華族家から嫁を貰うことに戸惑ったという。離婚してアメリカに住むAは祝福してくれたが、W家でもBの結婚は反対した。「身一つで来てください」というZの言葉を信じて嫁いだものの、Zの母親は本当に身一つで嫁いできたBに時々嫌味を言ったという。Zは実家の事業を退き、大学職員として働いた。Bは一男一女を得たが、その教育はAから受け継いだ方法を意識しつつ、Zを前面に立てて行った。カトリックの教えはZ家にとって重要であった。子どもたちを日曜学校に通わせ、信者会へも入れた。病弱な長女には宗教が必要と考えた。学業も無理はさせなかった。夫への遠慮もあり、自分が華族出身であることは意識して出さずに子育てをした。実家のW家には年始の挨拶に行く程度で交流はほとんど持たなかった。W自身が、孫の訪問を快く思わなかったためである。病弱だったCの国立小児病院への通院が、ある時期生活の中心であったが、CもBと同じカトリック系女子教育機関J校に進学させ、大学もカトリック系女子大学を卒業させた。長男は受験の名門T校から父親の勤める大学に進学し、大学院を経て現在は進学校S校の教員として勤務している。Bは英語を自宅で自身の母校の生徒を紹介制で教え、70歳を超えた現在でもそれは続いている。Bの長男が教員という道を選んだのは、Bの影響だとB自身は理解している。親世代が老年期に至る過程で、Bも長女としての責任から実家のW家を単独で訪れる回数が増え、いって「霞会館が父の世界」とBに認識されるWに

とって、3人の子供のうちBのみが戦前の女子学習院を経験し、華族文化を理解できる存在である。残存する華族社会や一族縁者との社交も必然的にBが担わなければならない立場であった。B自身、時代に翻弄された父親を、離婚に至ったAほど非難することはできないという。W家の3人の子供たちのうち、長男である弟が旧領地の神社の普請など対外的な支援をし、華族社会に憧憬にも似た親和性を持つ妹が介護など生活上の支援を行い、AをサポートするのがBの役目というが、現実にはW家への関わりも深い。最近、孫のDがV家やW家の歴史に関心を寄せるようになり、時々聞いてくるようになったのが嬉しいと顔をほころばせるBであった。

4-3. Cの生活史の「語り」から

CはBの第1子として昭和35年(1960)に東京で生まれた。病弱だったCは国立小児病院に定期的に通院する生活だった。幼稚園から母親と同じカトリック系女子教育機関J校に進んだ。進学動機は、母親の出身校だったからだと本人は理解している。入園のための準備として、J幼稚園専門の準備教室に週1回通っている。入園に際し、他の学校は受験していない。面接がある入園試験は、親世代が出身であることは、教員と親が顔見知りである事などから多少有利であると認識している。通園は、自動車通勤であった父親が引き受けたが、小学校1年生の早い時期に自立したという。Cは幼稚園、小学校……と上級学校に進学するごとの特色を語った。幼稚園はカトリック色が強かったが、小学校は人間関係のトラブルがとても多かったという。C自身はカトリック学校であっても、「神はべつもの」という自覚を小学校のときに持ったという。教師による「えこひいき」もあり、教師はバランスよく子供を見ていないと感じたが、こうしたトラブルは学校が上級になるに従って少なくなった。中学受験で制度的に大幅に外部から進学してくるが、活性化されて良いと感じていた。学

力も中学入学時点では、内部進学者との差があるが高校の時点では混然としてしまうと笑った。Cが一番驚いたのは、中学以降の入学者の親の在り方だった。例えば、小学校時代までは、友人の家に遊びの行き来があると、帰宅後、必ず親どうしが電話で御礼を伝えるのが当たり前だったが、中学以降に進学してきた家庭の親たちは、わざわざ御礼の電話などかけてこなかった。それが当たり前になった。大学受験に関しては、高校2年までに受験科目はすべて終了していたが、学校の勉強だけでは受験は困難と考え予備校に通った。世間では「御三家」と言われるが、自分としては「受験校？」という感じで冗談とはいえ、「良いお母様になるための学校」という感じがすると語った。母親であるBが自分の出身校に強いプライドを持っていたため、家庭教育と学校教育は合致していたと感じている。Cはその後、スペイン系カトリックの女子大英文科に進学した。これまでのカトリック学校とはシスターの雰囲気異なり、シスターが自動車の運転をしたり、ギターを弾いたりして「カルチャーが違う」と感じたという。大学生活は私服になり、どこの学校の学生かわからないようになったが、生活のリズムは、高校卒業以前と大きく変わることはなかったという。家庭では父親は甘かったが、父親自身の価値観が反映した教育だった。例えば、大学に進学し、自動車の運転免許を取りたかったが、「女性は助手席に乗るもの」と父親に言われ、母であるBも「パパがそう仰っているのだから」とBの本心はどうであったかわからないが、父親の反対するものは駄目だった。弟は自動車免許を取ったら、すぐ自動車を買って貰っていた。CはBからしつけの面でうるさくしつけられたという。とくに「食事の仕方、箸の使い方は育った環境が出るから」と厳しかった。また、親子が同じ学校の出身であると、「学校（校長様）が求めていることを一から言われなくても済むがニューカマーだとそうはいかない」と語った。Cは会社の同期だった男性と25歳のとき結婚した。現在高校3年と中学1年の男児の母親となっている。夫の両親はプロテスタントで

あり、規範が違ふと感じた。病弱であったため、結婚時は「子ども」が将来設計にはなかつたというが、子育ての主たる担い手はCである。東京生まれ、東京育ちの夫ではあるが、高校まで公立で大学のみ私立を卒業している。Cは結婚時、夫の両親が自分の母校であるJ校を知らなかつたことに大変なショックを受けた。そのときは、自分の家が教育に価値を置き、親世代のみならず、幼少期から代々私立で教育を受けてきた両親の気持ちを見ると、(この結婚が)「申し訳ない」と思ってしまったという。それは子育てにおける夫婦の方針の違いに現れた。C自身は、幼稚園、小学校など早い時期から子供を私立へ進学させたかつたが、夫が「私立偏重だ」と批判的であつたことで断念したという。しかし、中学受験は夫にも理解できる位当たり前になっていたことから、小学校3年から塾通いをさせた。進学先としてはCの弟の出身校を希望して進学を果たした。第1子は現在高校3年であるが、「しつけは自身が親から受けたようには厳しくしていないが、挨拶や目上の人への儀礼はきちんとできればと思つている」と語つた。夫は受験準備に関しても、本人次第にさせているが、参観日には参加するし、家族旅行もする普通の家庭で、バランスは取れていると感じている。次男は中学受験が終わつたばかりであり、大学付属のプロテスタント系共学校に進学させたが、これは「ご縁」と笑つた。長男と次男の学校生活や普段の生活は全く異なるが、宗教色が強く、共学の次男の学校に親として慣れる段階だと語つた。子供たちの将来は進学先も職種も夫と同じ必要はないと語つた。自身が華族の末裔であることについては自分の日常には全く影響がないし、意識もしないが、父方より母方の文化を引き継いでいると思つたという。Aは自分にとっては、行動力があり「格好の良い人」であるが、「普通のおばあちゃま」である。「あるとき、親戚の誰かが亡くなって、Aの知人がお悔やみの電話をかけてきたが、そのとき、電話に出た自分に『……様がお隠れになつてさぞ……』と言われ、意味がわからなかつたと笑つた。言葉使いでは、Bは夫(Cから見て

父)や弟妹(Cから見て叔父・叔母)に対して敬語で話していた。Aは友人・弟妹(Cから見て大叔母・大叔父)に対して敬語で話していたが、Cの家庭ではそれはない。現在Cの交友は、殆ど高校までの友人だ。最近、長男Dがガールフレンドを自宅に連れてきたが、自分の出身校の後輩だった。「男の子しかいないので、もう、うちは打ち切り(同じ学校に進学させることはできない)。だけど、こういう形があることはとても嬉しかった」と語った。

4-4. Dの生活史の「語り」から

自由を校風とする受験の名門T校の生徒らしく、髪を赤く染め、お洒落な日常着を着て、階下に降りてきたDが開口一番語ったことは、「こんな自分を育ててくれてありがとう、っていう率直な感謝ですね」であった。現代風の外見との落差を感じながら面談は始まった。Dによると、「親というのはスゴイ」、というものらしかった。「自分は親になるなど、絶対考えられない」、ということだった。家庭について、D自身はどちらかという父親に似ていると考えており、父親が在宅する時間が短いので、意識して父親と接するように心がけているという。しかし、影響は「父親をベースに母親型」と苦笑した。家庭はバランスが取れていると感じている。自身は叱られた記憶がない。中学受験で現在のT校に進学したが、母方の叔父と同じ学校だったので安心はあったという。結局、母親が行かせたかったところに落ち着いたと感じている。小学校5年頃から受験準備を本格的に始めたが、受験の先にビジョンはなかった。現在、在籍する学校は「良くも悪くも自由。しぼりがない分、自分次第」、「勉強自体は嫌々やっているわけではない。危機意識もある。」予備校には高校2年の春休みから通い始めた。結構ストレスに感じているという。家庭教育は学校教育と一致している。大々的な反抗期はなかった。家庭も「がんじがらめ」ではない。「自分はやる前に考えるので、親からの信頼はある。

世間から外れて良いとは思わない。」と語る D であるが、大学進学は、大学の延長上に職業があると考えており、金融業である父親の職種に興味はあるが、就きたいとは思っていない。自分の恋愛観、結婚観については、「atmosphere が似ている人、恋愛が結婚の延長上にはない」とはっきりしている。自身が華族の末裔であることについては「内申書？ 何かで先生が知っていたらしく、日本史の授業のあと、『大事にしろ』と言われた。それから少し関心が出て、祖母に聞いたりしている。自分の日常に影響はないが、『悪くないな』と思い始めている。もっと意識して調べようと考えている」と語った。

5. 考 察

以上が、「語り」の概要である。今回は紙幅の関係で筆者があらかじめインタビューの内容を整理してまとめた。上記内容から、まず、イ) 調査協力者たちにとっての教育の意味づけ、次に、ロ) 再生産と教育の関係、最後に、ハ) 階層と教育について考察を整理する。

イ) 調査協力者たちにとっての教育の意味づけ

A, B, C, D のインタビューを通して、まず、家庭教育が学校教育の補完物になっている姿を挙げたい。このことは、すでに 1920 年代の教育分析においても明らかにされているが、大正年間、昭和の初期の教育体験を語った A の「語り」でも、A の父親が自ら学校の予習の指導をしていること、学校の教師の「身分」より、教師という「立場」を敬うように子供たちに伝えていることなどから一端が伺える。つまり、それ以前の武家社会における、女子の家内教育が、社交を含めた結婚後のノウハウと単純に結びつけられていた立場から、生まれ育った家庭から、結婚による新しい家庭に至る中間に「学校」という社会が参入し、親のまなざしは、程度の差はあれ、目の前の「学校」を意識したものとなる。実際 A の兄は別棟で書生と同居しながら勉強に励み、結果として兄と

弟は東京帝国大学に進学している。森岡も指摘するように、明治後期から大正年間を通じて、宮内省自体、学習院教育の独自性を薄めて文部省の諸学校令に準拠し、大学教育は帝国大学への合流によって達成（森岡，2002）させるという方針に変化していた。この男子への高等教育戦略は、女子教育への影響もあったと考えても良いだろう。さらに、時代が下がるに従って、学校で学ぶ教育は当事者の「生きる手段の獲得」と認識されるまでその地位を高めるに至る。B自身の教育体験は、B個人にとっての教育と、Cに向けられた教育では性質が異なっている。Cについての教育戦略は再生産の視点から後述する。では、B自身は自らの問題として教育をどのように意味づけたのか。B個人にとっての教育は「生きる手段の獲得」であった。Bは敗戦を境に、身分によって維持されたきた生活環境が瓦解することを身をもって体験した。経済的な自立が、自分を解放する手段と考えたBは、もともとAの薫陶を受け、内省的で勤勉だったことも身を助け、自力で大学に進学する。大学では教員免許も取得し、「職業につながる学問」はBの一生を通じての信念だったとも言える。Bの父親Wも音楽家として雅楽の演奏をし、いくつかの企業の役員に名を連ねていたとしても、実業そのものに携わったわけではない。Bが学問を糧に生きようと考えても不思議ではないと言える。ちなみに、Bの弟は大学卒業後、企業の研究者になり、妹も美大を卒業し母校の美術教師を務めた。Bの夫は大学職員であったし、Bの長男も教員になっている。Bの娘であるC自身は、大学卒業後一般企業に就職し、社内結婚をして家庭に入った。C自身の子育てに教育を糧に生きるという印象は伺えない。ところが、その息子であるDは高等教育の延長上に職業を明確に意識し、学校選択も職業につながる専門性を意識している。このような世代による受け止め方の違いは、このケースにとどまらず、広く一般にも共通した特色として見出せるかもしれない。

ロ) 再生産と教育の関係について

学校歴の再生産は、AからB、BからC、Cの弟からDへと実際にインタビューした範囲でも起こっているが、実際に、家系図を作成すると、血族、姻族を通じて再生産の様子がより鮮明になる。Bが娘であるCを自身と同じ学校に進学させたのは、B自身が母校に強い愛着と誇りを持っていたからであるが、娘であるCに対しては、自身の「糧を得る手段としての学問」を与えてくれる場所というより、むしろ、「人生を豊かにする上での学校」であった。BはCへ学問的勤勉さは要求せず、Cも要求されたという認識はない。しかしながら、Bの愛校心は深くCに伝達され、時に学校内で起きる「教育上の矛盾」に葛藤しながらも中年期に至った現在、結果として母校愛を自覚している。現在、Cの社交のほとんどが高校までの友人ということを見ても、BがCに向けた教育戦略は、学問的側面より、人間の輪を求めた学校選択という側面が強い。Cには、自身が伝統校の出身であること、それも幼少期から一貫して在籍していること、親世代もそれぞれ私学の一貫校を卒業している事実が高い誇りとなっており、それは、Cの子育てに表れている。Cは自身の子どもが男児だったために、Cの弟と同じ学校に進学させている。一貫校出身であることへの自負の念の源泉はいくつか考えられるが、現代においては高額な教育投資が可能だった出自への誇りとも解釈できるように思う。

ハ) 階層と教育について

本事例を、現在の階層ピラミッドの枠で「上層」と定義づけることは難しい。それは、現在の階層の定義が「個人」を焦点化し、所得と職業という指標に特化する傾向があるからである。しかしながら、この4世代の考察を通じて明らかになったことは、彼らが個人化されたメリトクラティックな学校選択より、むしろ、「前の世代を踏襲する」という行為を選択し、「長く続く」ことに限りない価値を持っていることであ

る。まだ、仮説の段階を怖れずに言うならば、上層の、特に華族文化を継承する人々は、学歴取得を媒介とした階層移動（この場合は維持）とは異なる視点で教育をとらえる眼差しがある、ということが言えるかもしれない。写真資料からもわかるように、彼らは、手紙、証書、調度品等々に価値を置き、親世代と同じ学校、同じ文化を共有する集団の中に安息を見出すのである。このことは取りも直さず、階層維持機能として働き、現代社会においては、まず、学校選択に顕れると言える。女子学習院の出身であることが生涯の誇りである A、現在に至るまで母校の在校生に紹介制で英語を教え続ける B、在学当時は反発を感じながらも卒業後は高校までの人間とのつながりがほとんどという C、男の子だったがゆえに母親と同じ学校には進学できず母方の叔父と同じ学校へ進んだ D たちの学校選択、すなわち、教育戦略は、階層維持を潜在的に包含していると言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、ある大名華族家複数世代の生活史から、特に「教育」に焦点を当てて考察した。これまで見てきたように、A 世代ですでに学校教育が家庭教育に優越している姿を見出したが、それでも教養としての家庭教育的側面はまだ残っている。B 世代になると、生きることと学問することが近接し、そのために学校の価値が肥大する。さらに、家庭教育はしつけと同義語として認識されるようになる。C 世代になると学校教育の意義は、再生産的価値で考えられるようになり、家庭教育は、しつけと同義語として認識されている。本調査における D 世代は、未成年であることも影響していると思われるが、受験も進学も所与のものとして受容している姿が伺えた。

今後の課題としては、実体としての再生産の姿は明らかになったが、学校歴を再生産する意義を特定するには至っていない。また、教育以外の

「文化」的再生産については紙幅の関係で割愛した。さらに考察していきたいと考えている。

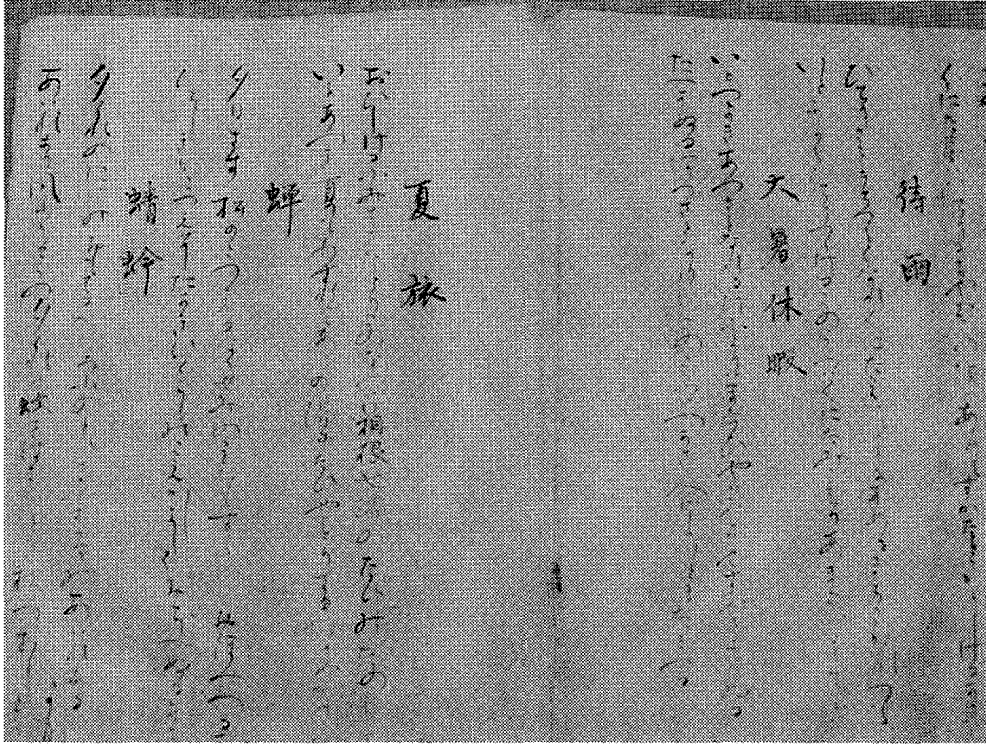


図2. Aの父親の日記・全編に子どもを思う親心が綴られている(写真・A提供)

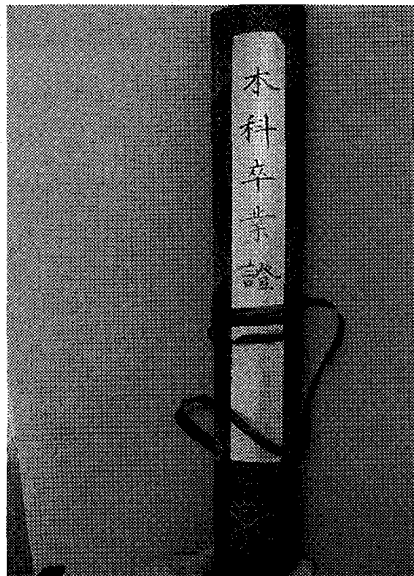


図3. 女子学習院の修了証書をAは肌身離さず異国へも携えた(写真・A提供)

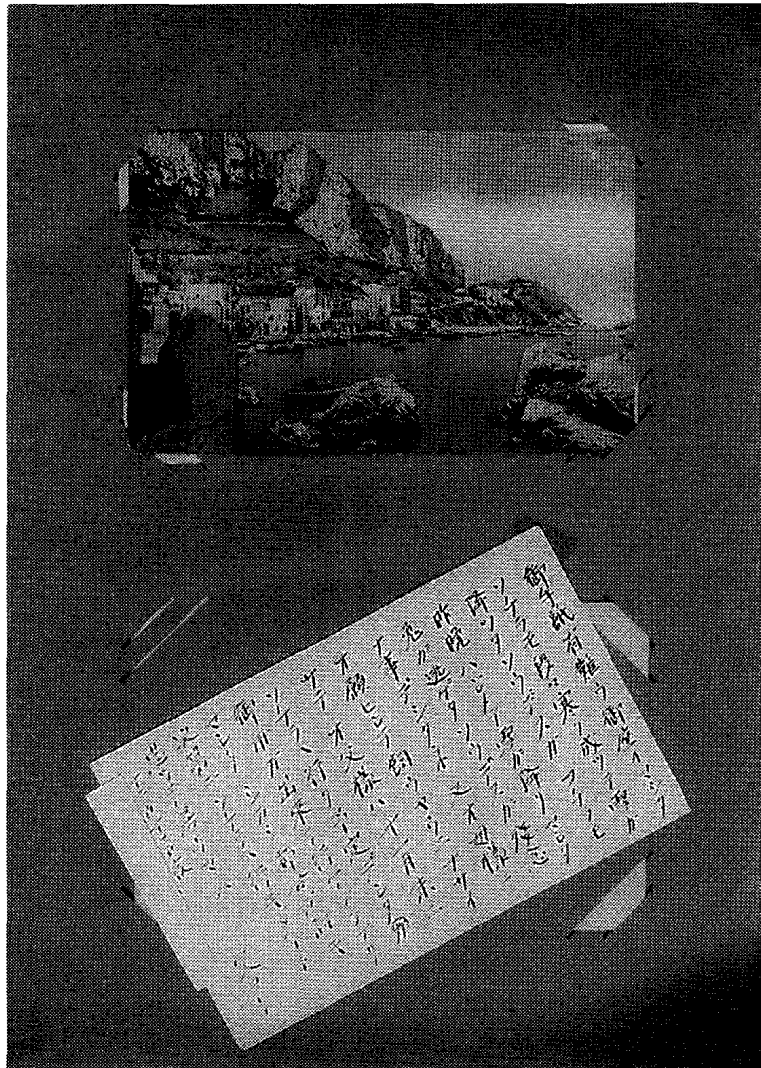


図4. 疎開先に届いた絵はがき（写真・B提供）

参考・引用文献

- 天野郁夫, 1982『教育と選抜』教育法規出版
有賀喜左衛門, 1966『有賀喜左衛門著作集 I, II 日本家族制度と小作制度』未来社
浅見雅男, 1999『華族たちの近代』NTT 出版株式会社
浅見雅男, H17『闘う皇族』角川選書
ベーコン, アリス, 2003『明治日本の女たち』みすず書房
ブルデュー, P., 石井洋二郎訳 1990『ディスタンクシオン I, II』藤原書店
ブルデュー, P., 宮島喬訳 1991『再生産』藤原書店
ブルデュー, P., 石井洋二郎監訳 2002『遺産相続者たち』藤原書店

- 雙葉学園 80 年の歩み編集委員会, 1989『雙葉学園 80 年の歩み』非売品
 原純輔編, 2000『日本の階層システム I』東京大学出版会
 鳩山春子, 1990『自叙伝』大空社
 保科順子, 1998『花葵』毎日新聞社
 稲木紫織, 2004『日本の貴婦人』光文社
 石井洋二郎, 2002『差異と欲望』藤原書店
 神一行, 2002『閨閣改訂新版』角川文庫
 カトリック女子教育研究所, H15『カトリック女子教育関連歴史年表』
 小山彰子, 2004「明治・近代女子教育覚え書き」『哲学』慶応義塾大学
 女子学習院, 1935『女子学習院 50 年史』5 非売品 p. 369-370
 タキエ・スギヤマ・リブラ, 2000『近代日本の上流階級』世界思想社 p. 312-313
 森岡清美, 2002『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館
 宮島喬, 1996『文化的再生産の社会学』藤原書店
 宮島喬編, 2000『講座社会学 7 文化』東京大学出版会
 日本女子大学女子教育研究所編, 1967『明治の女子教育』
 大沢俊吉, 1985『松平家 400 年の歴史』恒文社
 小田部雄次, 2001『ミカドと女官』恒文社
 小田部雄次, 2002『四代の天皇と女性たち』文春新書
 小田部雄次, 2004『家宝の行方』小学館
 小田部雄次, 2006『華族』中公新書
 榊原喜佐子, H8『徳川慶喜家の子ども部屋』草思社
 佐藤朝泰, 1981『閨閣』立風書房
 佐藤朝泰, 1987『門閥』立風書房
 佐藤朝泰, 2001『豪閥』立風書房